

学校名：群馬県立伊勢崎興陽高等学校



氏名：岡橋 弘和

● 実践教科等：課題研究

● 時間数：6時間

● 対象生徒：高校3年生

[担当教科：農業科(食品化学等)]

● 対象人数：42人

1 単元名

「食のグローバル化～これから美味しいごはんを食べ続けるために私たちにできること～」

2 単元の目標

- ①食を通して、国際社会の一員であることを認識し、国際社会の平和と発展、持続可能な社会づくりに貢献しようとする態度を育てる。(多面的、総合的に考える力)
- ②ザンビアを一例に、外国の人々や文化の理解を深め、また世界と日本のつながりに気づき、多文化共生の素養を養う。(つながりを尊重する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本とザンビアをはじめとした他国の食文化や国民性の違いと多様性に気づく。【多様性】
- ・我々の食卓が外国から多く輸入をし、相互関係にあることに気づく。【相互性】
- ・国際社会の一員として、持続可能な社会づくりの責任があることに気づく。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

国際化・多様化が進むこれからの社会では、「異文化理解」や「共生」、「持続可能な社会づくり」が重要である。本県、ひいては我が国においては、少子高齢化が進み、外国人労働者が増える見込みが強い。そうした社会情勢において、多文化で育った人々が、互いの文化を尊重し、共に考え判断し、主体的に生きる力を育む態度の育成が急がれると考えられる。

そのためにも、生活に一番身近な文化である「食」を通して、我が国や諸外国の多様性や相互関係を学び、世界における役割と責任を認識するとともに、これからの国際社会の一員として活躍できるような素養を身に付けさせたい。

(2)生徒観

本校は総合学科であり、1年次の11月に6系列(いのちと緑を育む系列、花と緑で環境を創る系列、食を科学する系列、食と経済を考える系列、福祉と人間を学ぶ系列、生活と文化を築く系列)に分かれ専門科目の学習内容を深めていく。

本科目を履修する生徒は、「食を科学する系列」の3学年42名であり、授業実践時はその半分に当たるbクラス21名(男子5名、女子16名)の授業である。

クラスの雰囲気としては、明るく活発であり発問に対する回答も積極的な生徒が多い。海外経験者は少なく、外国に対して興味は持っていますが、国際関係に関しては知らない生徒がほとんどである。

(3)指導観

本校の教育目標は、「食と生活及び環境学習を中心に、情報化・国際化・少子高齢化社会に対応しうる専門的技術と科学的精神を培い、地域に貢献できる豊かな情操と徳性を備えた人材を育成する。」である。本単元では、生徒に一人一人に「国際社会の一員である自覚」を持たせ、「持続可能な社会づくり」について、自らの答えを導きださせることをねらいとし、教育目標と関連付けた指導を行いたい。

本単元では、実生活にも密接に結びつくことからグループ学習などによる能動的な学修を積極的に働きかける。また、単元内容が多岐にわたるため、学習内容に系統性を持たせ、知識や考えの変移を

記録するために、一枚ポートフォリオ(以下、OPP)を学びの柱とする。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	食のグローバルゼーションに対して関心を高め、問題解決に臨むことができる。	相手の話に傾聴し、自分の意見を伝え、建設的に話し合いをすることができる。	自らの考えを言葉や図式にまとめ、グループまたは、クラス内で発表することができる。	持続可能な社会づくりのために必要な事柄について理解を深める。
評価方法	ワークシート OPP	グループ学習	グループ学習 OPP	ワークシート OPP

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界の食卓	・日本と他国の食文化の違いを知る。	・グループごとに、写真から気づく食文化を発表する。 ・グループ学習(フォトランゲージ)
2	食料自給率とフードマイレージ	・食料自給率の意味するものに気づく。 ・フードマイレージについての理解を深める。	・自身の食事の食料自給率を調べる。 (「けいさん!こくさん」HP) ・食料自給率の低数値が招く、フードマイレージ問題を扱う。
3	コーヒーの消費と生産	・コーヒーの消費と生産について南北問題に触れながら理解する。	・コーヒーにまつわるクイズを通して、南北問題について理解する。 ・生産者・企業・消費者のロールプレイを通して、サステナビリティの重要性を学ぶ。 ・グループ学習(ロールプレイ)
4	ザンビアと日本、食品比べ	・ザンビアについて知る。 ・ザンビアと日本の食品の違いから、両国の食品の特徴に気づく。	・ザンビアと日本の食品の違いから、両国の食品事情について理解する。 ・グループ学習(ジグソー法)
5	ザンビアにおける日本の国際協力	・ザンビアに対する日本の国際協力の意義について	・ザンビアの抱える問題、それに対する日本の国際協力のアプ

		考える。	ローチや様子を実際の事例を見ながら学ぶ。 ・グループ学習(ランキング)
6	私たちにできること	・より良い食文化を持続させるために、未来の理想図をまとめる。	・今のまま進むと想定できる未来と自分が考える理想の未来を比較して、自らの考えを言葉や図式にまとめる。

7 授業事例の紹介

小単元名【ザンビアにおける日本の国際協力】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月21日(月)第2限

(イ)実施会場 多目的室

(ウ)本時の目標 世界にある国の一例としてザンビアについて知り、ザンビアが抱える問題とそれに対する日本の国際協力の現状について理解する。

(エ)指導のポイント

- ・グループ学習を通して、能動的な学修を働きかける。
- ・教師の体験談を交えて語り、外国への興味関心を高めさせる。
- ・ザンビアの発展に対して、遠くの外国である日本が行っている国際協力の意義を考えさせる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 0	・既習内容及び目標確認	・本時の目標及び学習内容について説明を聞く。	一斉	・本時の目標をしっかり傾聴させる。	・教室や机上のレディネスが整っている。
展開 5	スライドを用いて、ザンビアで活躍する人物を紹介する。	・ザンビアで国際協力に携わる日本人について知る。		・ワークシートと連動させて、見る、考える、書く時間を分ける。	・積極的に授業に参加している。【A】
15	個人の意見をワークシートにまとめさせる。	・国際協力の必要性について、重要度と理由について個人で考える。		・グループ学習の前に、個人としての意見を整理させる。	
20	グループで個人の意見を共有させ、学び合いをさせる。	・国際協力の必要性について、ダイヤモンド型ランキングシートを用いて、グループで考える。	グループ学習	・全員が話し合いに参加するように支援する。 ・ランキングに正解はないことを伝える。	・学び合いができていく。【B】

30	グループの意見を発表させる。	・グループで考えたランキングを発表する。		・他者の意見に傾聴させる。	・傾聴できている【B】
40	スライドを用いて、ザンビアで活躍する人物を紹介する。	・JICA とその国際協力の手法について紹介する。	一斉	・先に紹介した日本人は皆、JICAのもとに活動をしていることを伝える。 ・ODAとJICAの関連について理解させる。	
まとめ 45	授業の取りまとめをする。	・OPP に本時の一番大事なことを記入する。 ・次時の予告。		・出来上がった OPP を提出させる。	

A: 興味・関心・意欲 B: 思考・判断・表現 C: 技能 D: 知識・理解

【授業の様子】



国際協力に携わる人々を紹介



グループで意見の共有



ランキングの作成



書画カメラを用いて発表



JICA の取組について紹介



OPP に気づきを記入

(2) 授業の振り返り

〔良かった点〕

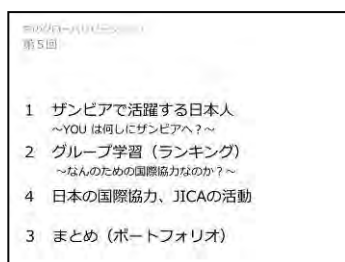
- ・生徒がザンビアの抱える諸課題に対して、高い関心と当事者意識を持って考える姿が見られた。
- ・重要度のランキングをつける際に、一番重要度の高いものは各班に違いがみられ、考え方に多様性が生まれた。
- ・納税後の税金の一部が ODA になり、JICA の国際協力という形で平和構築に貢献しているという流れを生徒の認識が持てた。

〔反省点／改善点〕

- ・「何のための国際協力なのか」というランキングの設問に対して、重要度の高いものには違いがあったが、重要度の低いものを選んだものがいずれの班も「日本のため」となった。日本の国際協力が、周りに回って、「日本のため」につながるような補足説明や、説明スライドを作成が改善点として考える。

(3) 使用教材

・スライド抜粋



本時の流れ



何をしている人でしょう？
＜フォトランゲージ＞



関連するキーワードの説明



国際協力内容を写真で説明



発問「国際協力の必要性」



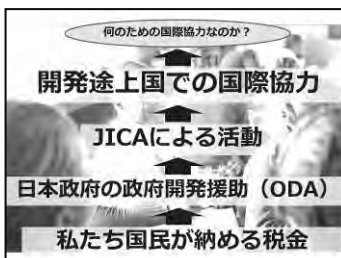
紹介した人物は JICA 関係者



JICA の説明



JICA の取り組みについて

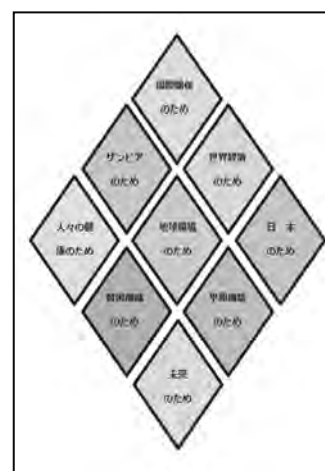


ODA と JICA の関連性

・プリント等

ワークシート
＜個人で1枚＞

ランキングシート
＜グループで1枚＞



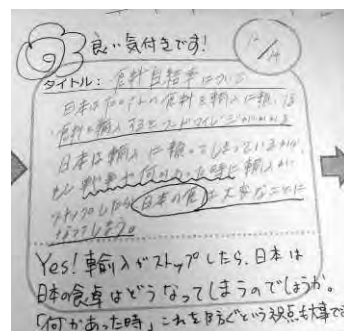
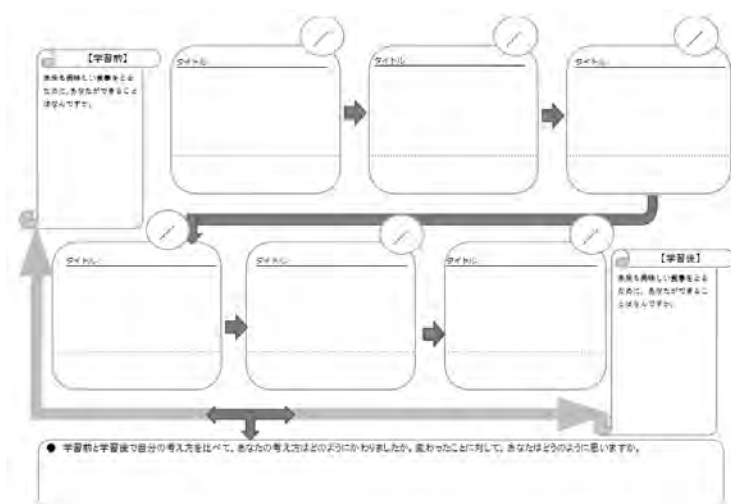
ランキングカード
＜切って配布＞

(4) 参考資料等

- ・JICA PROFILE（独立行政法人 国際協力機構／平成 27 年4月）
- ・JICA の仕事（独立行政法人 国際協力機構 広報室／平成 26 年4月）
- ・開発教育・国際理解教育ハンドブック ＜アクセス日：平成 27 年 12 月 28 日＞
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/edu/kyouzai/handbook/html>)

8 単元をととした生徒の反応/変化

・本単元の1枚ポートフォリオ(OPP)



毎時、授業のまとめ時に、授業のタイトルと授業時に気づいたことを記入させた。

(問) 未来も美味しい食事をとるために、あなたができることは何ですか。(以下、回答一部抜粋)

<学習前> たくさんお金を稼ぐ。健康でいる。 / 食べ残しを失くす。伝統料理を受け継ぐ。

<学習後> 国際協力をして世界を豊かにする。 / 食品はサステイナブル認証のものをかう。

・「日本は何のために国際協力をやっているのか、友達それぞれの考え方が違って面白かったです。実際にザンビアに行って仕事をしている人に比べたら何もしてないけれど、私たちが納めている税金が役立っていると考えたら嬉しくなりました。未来の食事のためにできることは、私個人だけでなく世界をよりよく変えなければいけないという必要性に気づきました。」

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1) 国際協力の在り方や必要性を取り扱う授業プランについて

派遣前は、ザンビアの食品と日本の食品を比べることから経済や国際協力などに触れ国際理解教育を中心とした授業の展開を考えており、できるだけ多くの食品を購入をと考えていた。しかし、研修は多岐にわたり、なるべく多くのことを授業に還元したいと思った。そのため、予定していた単元を「外国の食品」から「食のグローバル化」に広げ、科目は農業科「課題研究」で取り扱うことにした。教材はザンビアで得たものだけでなく、開発教育協会発刊の教材も使用・参考にすることで、学習の展開を行った。扱う内容の幅広さから、授業に一貫性を持たせるために、OPP を使用したことは、生徒の考え方の変容等を知る機会としても非常に役立った。

(2) 成果と課題(CHECK)

はじめの発問やアンケートを見返すと、複数の生徒において海外に対する興味関心や知識は低いものだった。学習を進めるにつれ、外国の食卓や、フードマイレージ、サステイナブル認証、ザンビアの食品、国際協力の現状と触れていき、生徒一人一人の考え方にさまざまな変容を、発言やプリントみると実感できた。授業実践全体を振り返ると「課題研究」という科目の特性上、実験・実習によって知的探求を課すような単元も設定すべきだったように思う。

(3) 課題の改善策(ACTION)

「食のグローバル化」は国際協力の重要性だけでなく、世界の多様性を学ぶ単元でもある。食を科学する系列では、座学だけでなく実習科目で技術の指導を行っている。そのため、①生徒に諸外国(アフリカ中心)の食品、料理を調べさせ、実際に実習で試作、試食を行う。または、②外国籍のレストランのシェフを社会人講師として招き、製造・調理実習をする。今後①や②を検討し、目標に掲げた多文化共生の素養の育成を、実習を通して身に付けさせる学習機会としていきたい。

10 教師海外研修に参加して

授業実践時の生徒の感想の中で「同じ日本人として、嬉しい誇らしい」という文があった。このことは教師海外研修中私も見学サイトをまわる中で、強く感じたことである。そのことを、授業を受けた生徒が同じように感じてくれたことが私にとって一番の成果であるように感じる。競争だけでないグローバル化を、今後も生徒に伝えるときに、私ができる「国際協力」を考えて行動に移していきたい。